



空を見る

糸崎始発岩国行きの列車に乗りこんだ時、辺りは既に暗くなっていた。

この列車に乗るときいつもそうしているように、周りの空席を探して席に着く。荷物を足下に置くと、窓枠にひじをついて、なんとなく、ぼうっと窓の外を眺めた。窓の外、といっても、もう外は真っ暗だから、実際に見えるのは列車の中の景色だった。列車の中は案外混んでいて、席はだいたい埋まっていた。座席の横に立っている人もちらほら見かけられるようだった。

ぼくの隣の席では、二十代くらいの男性がずっと携帯電話をいじっている。だから、右を向くと何やら盗み見ているかのような構図になってしまう。実際、一度こっちのほうをチラッと見られたような気がするから、あちらとしても多少ならず気にしているのだろうと思う。

向かいの席には、女子高生が座っていた。部活帰りで疲れているのか、ぼくと同じように、何をするでもなく外を眺めている。女子高生、というのは難しいもので、たまたま視線がぶつかったときに、「何だコイツ」とか思われていそうな気がしてしまう。もちろんそんなことはないんだろうけど（ないよね？）、やっぱりそういう気まずさというか、居心地の悪さを感じてしまって落ち着かない。

後ろのほうを向いていると首が痛くなること請け合いなので、結局ぼくはずっと外を眺めている、というわけだ。別に何か景色に期待している、というわけでは全くなかったのだけれど、時々すれ違う乗用車の光とか、ガソリンスタンドの明りだとか、時折変化があって、それで退屈をまぎらすには充分だった。

広島駅に到着すると、大半の客が席を立つ。ぼくの車両の人間も例外ではなく、学生の話し声であふれていた車内が一気に静かになった。窓の外は明るかった。大勢の人がせわしげに歩いている。ぼくは相変わらず、窓の外を眺めていた。しばらくすると扉が閉まって、列車が動き出した。明るかった駅の構内を抜けると、元の通り、目に入るのは窓の内側の風景だけだった。

ぼくが少し驚いたのは、この列車の中に客が殆どいなかったからだ。まだ九時台である。普段なら立っている客も少なくないはずの時間、席がここまでがらがらなのも珍しい。ぼくが乗っている車両の中には、ぼくと、それから通路を挟んで反対側の、窓側の席に座っている四十代くらいのいかつい男性しかいなかった。頭にかぶった赤い野球帽が、えらく不釣り合いだった。

その男性は、スポーツ新聞を読んでいた。してみると、野球観戦の帰りではないのかもしれない。よくよく考えてみれば、こんな時間に試合が終わるはずがない。でもそうすると、頭の帽子がますます謎である。そんなことを考えているうちに、横川駅に着いた。この時である。ただでさえ不思議だった男に、新たな重大な問題が発生したのは。

ぼくが気になって仕方がないもの。それは、みかんの皮だった。先ほどのいかつい男性が残していったものである。

別に皮を拾ってゴミ箱に入れるか放置するかで葛藤していたわけではない。さすがのぼくでも、座席のど真ん中にゴミが残されていたら回収するくらいの道徳心は持ち合わせている。そういうことではなくて、どうしてみかんの皮が残されたのか、ぼくはものすごく気になったのだ。

いかつい＝ポイ捨て、というのはありふれた等式だけれど、先ほどの男性はビールの空き缶や、

ペットボトルや、読み終わった新聞などはきちんと持って降りて行った。持ちきれないほどゴミがあったようにも見えなかったから、男性があまり歓迎されない類の人間だったという、この理屈はおかしい。とってみかんの皮は座席のど真ん中にあるから、うっかり忘れたとも考えづらい。

じゃあどうして男性はみかんの皮を置いていったのか。これがさっぱり分からない。それでも気になって気になって仕方がないので、リュックのペットボトルを取り出してポカ리를飲みほすと、荷物を持ったまま隣の座席へ移動して、何が分かるというわけでもないのにしばらくみかんの皮を触っていた。

列車はすぐに、西広島駅のホームに入っていった。今回の旅、ぼくの目的地だ。みかんの皮に名残惜しさは感じたものの、どうしようもないのでその場に置いて、空になったペットボトルとリュックを抱えて列車を降りる。リュックを背中に乗せた後、切符を取りだそうとズボンのポケットに手を突っ込んだ。切符の感触がない。一瞬、列車の中に忘れてきたんじゃないかと不安になって、ふと後ろを振り返った。つい今しがたまでぼくが座っていた場所には、一人の女学生のシルエットが見えた。列車に乗りこんでから十分な時間はあったろうに、まだ座っていなかった。何か気になることでもあるのか、うなじの辺りの髪の毛を指でいじっているようだった。女の子の姿が見えなくなるまで、ぼくはずっと後ろを向いてその姿を追っていた。

切符は、反対側のポケットから見つかった。とても愉快的気分だった。駅員に切符を見せて、まだ長い夜道の第一歩を、ぼくは踏み出した。